

機関番号：33917

研究種目：若手研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19682004

研究課題名（和文） 南米アンデス地域におけるワリ期の社会動態の研究

研究課題名（英文） Social Dynamics of Wari Period in the Andean Region of South America

研究代表者

渡部 森哉（WATANABE SHINYA）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00434605

研究成果の概要（和文）：後6～10世紀に台頭したワリ国家はペルーの広い範囲を支配下に治めた。本研究はペルー北高地カハマルカ地方に位置するエル・パラシオ遺跡を事例として、ワリ国家の征服に伴い在地の社会にどのような変化が生じたかを考察した。2008年、2010年に実施した発掘調査の結果、同遺跡がワリ国家の大行政センターであることが判明した。カハマルカ地方がワリ国家の直接的支配下に置かれた一方で、在地の土器様式などの伝統は継続し、政治的支配と文化変化が必ずしも連動しないことを確認した。

研究成果の概要（英文）：The Wari state developed from the sixth to the tenth centuries and conquered a wide area of Peru. This research has focused on the changes that occurred at the local societies level after the conquest, taking as an example the El Palacio site located in the Cajamarca region of the Northern Highlands of Peru. Excavations in 2008 and 2010 made it clear that the site was great administrative center of the Wari state. While Cajamarca region was under the direct control of the Wari state, the local tradition of ceramic production continued without great change, suggesting that political dominion did not necessarily bring about cultural change.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総計	6,500,000	1,950,000	8,450,000

研究分野：アンデス考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、先史学、アンデス、ペルー

## 1. 研究開始当初の背景

(1)ペルー北部カハマルカ県に位置するパレドネス遺跡で2006年に発掘調査を実施した。その結果、後9世紀頃にチュルパと呼ばれる地上式墳墓が建設されたこと、副葬品としてティワナク様式土器が伴うことが確認された。ペルー北部で出土したティワナク様式土

器として世界初の例である。チュルパは在地のカハマルカ文化の特徴ではなく、明らかに外来の文化である。この時期にはペルーの大部分をワリ国家が支配下に治め、ボリビアの大部分をティワナク国家が台頭したと考えられる。そのため、ワリ国家の遺跡の発掘調査を実施し、ワリ国家とティワナク国家の関

係を把握し、パレドネス遺跡のデータを解釈する必要があった。

(2)ワリ国家の首都ワリ遺跡をはじめとする複数のワリ関連遺跡でカハマルカ様式土器が出土するため、ワリ国家とカハマルカの間には相互交流があったことは確かである。しかし、ペルー北部高地カハマルカ地方においてワリ文化の遺跡が調査されていなかったため、カハマルカ地方がワリ国家の直接支配下に置かれたのかどうか、あるいは政治的自立を保ったのか不明であった。

(3)ペルー北海岸に位置するサン・ホセ・デ・モロ遺跡で、ワリ様式土器とカハマルカ様式土器の両方を副葬品として伴う墓が確認されていた。したがってペルー北海岸とワリ国家の関係を理解するためにも、カハマルカ地方におけるワリ期の状況を解明する必要があった。

## 2. 研究の目的

(1)ワリ期のカハマルカ地方の状況を解明する。ワリ国家の支配下にあったのか、あるいは政治的自立を保ち、ワリ国家とほぼ対等の関係を保ったのかを理解する。

(2)カハマルカの人々とワリ国家の間に相互交流があったことは確かである。しかしカハマルカの人々はインカ帝国の支配下でも、土器製作をはじめとするその文化的伝統を保持したため、文化的変化は不明瞭である。カハマルカの強固な文化的連続性の実態を、発掘データを基に明らかにし、その理由を説明する。

(3)2006年にパレドネス遺跡で出土したティワナク様式土器は、ペルー南高地よりも北の地域で見ついている唯一の例である。しかし施紋方法などが非常に特異であり、単なる搬入品とは考えられない。またペルー北海岸においてもティワナク文化の影響があったことを指摘する研究者がいる。そのため、ワリとティワナクの間を、カハマルカ文化を含むペルー北部におけるコンテクストの中で理解する。

## 3. 研究の方法

(1)ペルー北部高地カハマルカ地方におけるワリ関連遺跡の発掘調査を行う。エル・パラシオ遺跡は1960年代からワリ文化の遺跡として言及されてきたが、発掘調査は実施されなかった。また現在、居住地や農地として利用されているためその全体的な広まりも不明であった。エル・パラシオ遺跡において発

掘調査を実施し、その広まり、及びその時期的位置づけを明らかにする。

(2)エル・パラシオ出土遺物を綿密に分析し、土器編年を精緻化する。カハマルカ文化はカオリンと呼ばれる粘土を用いた土器製作に特徴付けられる。緻密な紋様が施され、時期ごとに変化するため明快な時期指標となる。まずカオリン土器の編年をできるだけ細かく設定する。次にカオリン土器編年を参照しつつ、非カオリン土器の時期的傾向、土器の器種組成の時期的変化を把握する。

(3)エル・パラシオ遺跡で出土している土器や石器などの外来の文化要素に注目し地域間交流のあり方を復元する。まず外来遺物の起源となる文化の中心地を特定し、エル・パラシオ出土遺物と中心地の遺物を比較し、交易によってもたらされたのか、あるいはカハマルカ地方で製作されたものかを検討する。そしてその分布の背景をワリ国家の政治体制との関係から理解する。

(4)他地域で出土しているカハマルカ様式土器を網羅的に検討し、その器形、紋様の特徴をカハマルカ盆地出土土器と比較する。

(5)土器以外の遺物である石器、金属器、動物骨、人骨については専門家が分析を行う予定である。その準備作業として、各遺物の出土傾向を土器編年に基づく層位データを参照し整理する。

## 4. 研究成果

(1)エル・パラシオ遺跡において2008年にA、B、Cの3発掘区を設定し、発掘調査を実施した。その結果、全ての発掘区からワリ様式土器片が出土した。またA区、B区では典型的なワリ様式の建築が確認された。地表の観察から、確認できるワリの建築様式の壁の断片的な情報を総合すると、同遺跡は50ヘクタール以上の広まりがあると考えられる。

(2)B区の発掘調査を2010年に継続し、複雑な建築プロセスを明らかにした。共伴する出土土器から、建築物の大部分はカハマルカ中期B(A.D.700-800)、カハマルカ中期C(A.D.800-900)に建設され、カハマルカ後期(A.D.900-1200)のはじめまで利用されたと判断される。また、A区の建造物はカハマルカ後期のはじめに建設されたことが判明した。エル・パラシオ遺跡は想定よりも長期間利用されていたことは確実であり、今後、放射性炭素年代測定に基づき、建設年代をより正確に把握し、他地域の遺跡の年代と比較する必要がある。

(3) 複数の証拠からエル・パラシオ遺跡はワリ国家の行政センターと考えられる。まず建築物は在地のカハマルカ文化ではなく、ワリ様式に従って建設されている。また、カハマルカ地方には見られない半地下式で天井に巨大な平石を渡した墓が検出された。さらにワリ様式土器の破片が様々な地点、層位から出土している。副葬品としての完形土器が出土しているわけではないため、一時的な搬入品ではなく、恒常的にワリ文化の人々が活動していたことを示している。

(4) カハマルカ地方には産地のない黒曜石の破片と、尖頭器が出土した。また同様にエクアドルの海に生息するスポンディルス貝の加工品が多く出土している。多くの人々、物資が移動したことが明らかであり、それはワリ国家の政治体制と連動しており、一つの国の統治下で治安が確保された状態で可能になったと考えられる。ただし、搬入されたモノと、他地域から人々が移動し現地で製作したモノを識別する作業が課題として残されている。

(5) エル・パラシオ遺跡で出土するワリ様式の土器片やペルー北海岸系の土器は少数である。出土土器の9割以上がカハマルカ文化の土器である。したがってワリ様式の建築や墓を建設したものの、土器は変化しなかったと言える。土器の量と人口数が比例するとすれば、この場で活動していた人々の大部分はカハマルカの出身と考えられる。ワリ様式とカハマルカ様式の融合土器は非常に希で、融合土器が多く製作されたペルー北海岸などと比較すると特異である。各文化によってこだわりの要素は異なるが、カハマルカの場合は土器であったと考えられる。他の地方ではワリ期に大きな文化変化を蒙ったが、カハマルカ文化はなぜ連続的に存続したのか、今後検討する必要がある。

(6) パレドネス遺跡出土のティワナク様式土器をどのように解釈するかが本研究の課題の一つであった。エル・パラシオ遺跡ではティワナク文化的なスプーンの破片がさらに出土した。ワリ国家とティワナク国家は別個の政体であると説明されるが、ワリの支配域の範囲内でもティワナク様式の遺物が出土するため、両者は排他的な関係にあったのではなく、相互交流があったことは確かである。カハマルカ地方で確認されたティワナク文化的な遺物が被支配者として連れてこられた人々に起因するのか、あるいは逆にワリの支配が弱まった時期にティワナクの人々が入り込んできたのかどうかは不明である。パレドネス遺跡では、ティワナク様式土器が共

伴するチュルパが利用時期の後半に建てられていることから、ワリの支配の初期ではなく、後半にティワナクとの関係が活発になった可能性が高い。カハマルカはペルー北海岸へ至る主なルートであるため、今後ペルー北海岸の状況を踏まえて考察する必要がある。

(7) エル・パラシオ遺跡B区では20基の墓が検出された。その多くは建物が放棄される、あるいは改修される際に出入口付近に埋葬された。また、副葬品には、カハマルカ様式土器だけでなく、ワリ様式土器やペルー北海岸系の土器もある。また埋葬の上に新たな壁が建てられている場合が多く、建物の更新に伴う埋葬と言える。

(8) 平石を敷き詰めた床上で確認された奉納B5では、多くの土器が意図的に割られていた。無紋土器が多く、コップ形土器が主である。土器を意図的に割る行為はワリ文化に特徴的であり、カハマルカ文化の習慣ではない。

(9) エル・パラシオ遺跡で大量に出土した獣骨の多くは、ラクダ科動物のリヤマやアルバカのものであり、シカは少ないと考えられる。荷物の運搬、毛の利用、肉の消費がワリ期に活発化したことが分かる。これはワリ期の他の遺跡でも確認されている傾向である。それ以前のカハマルカ地方の品種と置換したかどうかは今後の検討課題である。

(10) エル・パラシオ遺跡ではT字形の石器が500点以上出土している。鋤の先端部につける農具であったと考えられる。ワリ関連遺跡は農地や水源に近い平らな場所に位置するという傾向があるが、それは酒の製造に用いるトウモロコシを大量に栽培するためであったと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

① Watanabe, Shinya, Continuidad cultural y elementos foráneos, en Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio. *Boletín de Arqueología PUCP*, 査読有, No. 14, 印刷中.

② 渡部森哉、峰和治、埋葬形態から見る植民地時代の社会変化—ペルー北部高地タンタリカ遺跡の事例、査読有、年報人類学研究、1号、2011、pp. 58-84。

③ Watanabe, Shinya, Dos monolitos del

sitio de Congona, sierra norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP*, 査読有, No.12, 2010, pp.53-67.

④ 渡部森哉、ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡の発掘調査-2008年、古代アメリカ、査読無、12号、2009、pp.123-139。

⑤ Watanabe, Shinya, La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines*, 査読有, Vol.38, No.2, 2009, pp.205-235.

⑥ Watanabe, Shinya, Grupos étnicos locales en el Tawantinsuyu, *Perspectivas Latinoamericanas*, 査読有, No.4, 2008, pp.81-89.

⑦ 渡部森哉、ペルー北部高地、パレドネス遺跡の発掘調査-2006年、古代アメリカ、査読無、10号、2007、pp.67-98。

⑧ 渡部森哉、インカ国家における地方支配-ペルー北部高地カハマルカ地方の事例-、国立民族学博物館研究報告、査読有、32巻1号、2007、pp.87-144。

[学会発表] (計15件)

① 渡部森哉、古代アンデスの国の形-インカとワリ-、中部人類学談話会第200回例会、2010年7月24日、椋山女学園大学。

② Watanabe, Shinya, Social Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca. 75th Anniversary Meeting of the Society for American Archaeology, 2010年4月16日, St. Louis, Missouri.

③ 渡部森哉、ワリ期の社会動態-ペルー北部の事例より、古代アメリカ学会第14回研究大会、2009年12月5日、南山大学。

④ Watanabe, Shinya, Continuidad y elementos foráneos en la cultura Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio. VII Simposio Internacional de Arqueología PUCP: Lenguas y Sociedades en el Antiguo Perú. Hacia un Enfoque Interdisciplinario, 2009年08月29日, Pontificia Universidad Católica del Perú.

⑤ Watanabe, Shinya, Proceso cultural en

el valle de Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio. 53° Congreso Internacional de Americanistas, 2009年7月20日, Universidad Iberoamericana.

⑥ 渡部森哉、ペルー北部カハマルカ地方、エル・パラシオ遺跡の発掘調査、古代アメリカ学会第13回研究大会、2008年12月6日、早稲田大学。

⑦ Watanabe, Shinya, Dos monolitos del sitio de Congona, sierra norte del Perú. Paper presented at the VI Simposio Internacional de Arqueología PUCP: El Periodo Formativo: Enfoques y Evidencias Recientes. Cincuenta Años de la Misión Japonesa y su Vigencia, 2008年9月5日, Pontificia Universidad Católica del Perú.

⑧ 渡部森哉、アンデス形成期と農耕・牧畜、中部人類学談話会第186回例会、2008年3月29日、椋山女学園大学。

⑨ 渡部森哉、考古学データから見た植民地時代アンデスの社会変化-ペルー北部高地の事例-、日本ラテンアメリカ学会中部日本研究部会、2008年1月12日、愛知県立大学。

⑩ 渡部森哉、ペルー北部高地、パレドネス遺跡出土遺物の分析、古代アメリカ学会第12回研究大会、2007年12月8日、国立民族学博物館。

⑪ Watanabe, Shinya, Grupos étnicos locales en el Tawantinsuyu. XIII Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe, 2007.09.28, Macau.

⑫ 渡部森哉、先スペイン期アンデスにおける埋葬形態に関する一考察、日本ラテンアメリカ学会第28回定期大会、2007年6月2日、南山大学。

[図書] (計5件)

① Watanabe, Shinya, Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca. In *Interregional Interaction and Social Change in Peru from 550-1000 AD*, edited by J. Jennings and L. J. Castillo. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima. 印刷中。

② Watanabe, Shinya, Arquitectura del

Sitio Arqueológico Tantarica, Sierra Norte del Perú. In *Arquitectura Prehispánica Tardía: Construcción y Poder en los Andes Centrales*, edited by K. Lane and M. Luján. Fondo Editorial de la Universidad Católica Sedes Sapientiae, Lima. 印刷中.

③ 渡部森哉、春風社、『インカ帝国の成立－先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、2010、504頁。

④ 渡部森哉、他、行路社、『地球時代の多文化共生の諸相：人が繋ぐ国際関係』（浅香幸枝編）、2009、pp.197-218。

⑤ 渡部森哉、他、世界思想社、『他者の帝国－インカはいかにして「帝国」となったか』（関雄二・染田秀藤編）、2008、pp. 165-184。

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡部 森哉 (WATANABE SHINYA)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00434605

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：